

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 福田 正宏

論文の分析対象は紀元前1千年紀の日本列島北部から極東ロシアで、その地域では考古資料の時間軸を設定する上で重要な土器型式編年に不備や空白が残されていた。申請者は、自らのアムール流域での発掘調査と日露両国での資料収集で得たデータの分析によって、当該時期・地域の歴史叙述にあたっての基礎データを提供し、文化配置やヒトや情報の動態を復元しており、完成度の高い研究成果を挙げている。

第1～3章では、縄文晩期～続縄文期前半の北海道の土器群を東北地方との対比で編年的に整理し、縄文晩期のものを亀ヶ岡系と在来系に分け、それらが融合・錯綜を経て続縄文期前半の道内で四つの異質の型式が成立したプロセスを明らかにしている。また、道北部の続縄文期初頭の土器を宗谷海峡周辺という枠組みで捉え、サハリン南部に分布する同時期の土器を含めて周辺地域との影響関係を論じている。以上の分析により、北日本の前1千年紀の土器編年が確立されたのである。第4章では、サハリン新石器時代の諸文化に関して、各々の土器型式を隣接地域との横の関係の中で認定し、北部ではアムール河口部周辺、南部では北海道と絶えず影響関係があったことを明らかにしている。さらに、続縄文期半ばの鈴谷式土器の成立によってこの南北の差が解消した可能性も指摘した。第5・6章ではアムール河口部周辺の新石器時代後期～初期鉄器時代の土器群をヴォズネセノフカ文化とウリル文化の系統関係、そして、ウリル系土器の変遷に注目して考察している。まずヴォズネセノフカ文化の土器の諸特徴を編年的に整理し、それとウリル文化初期の土器群との系統関係を捉え、次にアムール中流域のウリル系土器の編年をもとに河口部周辺の同系統の土器編年を構築し、サハリン北部の様相についても言及している。最後に、各章の分析結果に基づき、各土器系統の違いから極東アジア全体の文化構図の中で前1千年紀のアムール下流域～北海道の文化配置を説明し、道央とサハリン中部の植物地理区分ラインに文化系統の境界を求めている。そして、縄文文化に入ってきた南からの弥生系文化は道央まで及び、道東北～サハリン南部では縄文系文化が残り、アムール下流域～サハリン北部では縄文系文化と無関係なウリル系文化が存続し、紀元1千年紀後半のオホーツク文化期になって大陸方面の文化系統がサハリン南北の境界を越えるという仮説を提示した。

本論文は、地域毎の編年と地域間の対比、土器の動きに表われた地域間交流様態の解明といった個別研究を総括し、広域のアムール下流域～北海道の土器型式系統に基づく考古学的な文化配置を行った研究である。とくに学問的に未開拓であった間宮海峡周辺地域の調査研究に初めて本格的に取り組んだ点は高く評価できる。ヒトの動態のより深い追及と北東アジア全域への射程範囲の拡大が望まれるが、考古学的手法として現状ではこれ以上の追及はできないと考えるため、本論文の価値は損なわれない。

以上より、本委員会は、博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと認めるものである。